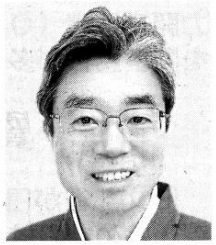
第45話

朝をひらく

媚びずにマイペース

ネコの魅力

永田 円了
真国寺住職



小さい頃ネコを飼っていた。名はチャコといった。どこから来たのか定かでないが、寺に住みついていた。気ままにひざに乗って来たかと思いきや、手をのばすとスルリとあっちへ行ってしまう。無理やり抱っこして、手が傷だらけになった時もあった。

この思い通りにならない動物になぜ人は魅力を感じるのだろうか。気まぐれで、頑固なまでのマイペース主義、尻尾を振って主人に媚びるイヌとは真逆の存在であるこのペットに、なぜか惹かれる。

ネコと人間との関係は1万年ほど前にさかのぼる。人間は進化の過程で身体も意識も変化をとげたが、ネコの方はかたくなにその性格を変えてはいない。いやその変わらない性格ゆえに魅力を感じるのであろうか。ネコの世界を描いた劇団四季のミュージカル「キャッツ」は30年以上もの間、次から次へと新しい人々を魅了し、9千回以上もの驚異的なロングランを続けている。ネコのもつ魅力とは何なのであろうか。

彼らは、媚びない、群れない、焦らない、そして人目を気にしない。これを書きながらハッと気がついた。これは人間の赤ちゃんと同じだ！　赤ん坊は泣きたいときに泣き、眠りたいときに眠り、人目を気にすることもなく、もちろん誰かに媚びることもない。ひたすらマイペースで生きている。そして周りは愛情いっぱいに目を細めて受け入れる。

それなのに人間は成長するにつれ、どうしてこうも周りを気にし、群れて媚びて焦るようになっていくのだろうか。「みっともない、人が見てるでしょう」と叱られる子供たち。物事が本質的に良いか悪いかではなく、他人の価値観で判断しようとする親たち。自分の存在が他者とのかかわりの中で上下する社会。私、俺、小生、あなた、君、お前、など自分や相手を表現するコトバが立場によっていろいろ変わる世界、ネコの目にはどう映っているのだろうか。

本来人間は、ネコのように自由に生きたいと思っている。しかし現実には、人は集団の中で妥協し、上に媚び、人の目を気にしながら日々を生きている。ああ、ネコがうらやましい！本来人間がもって生まれた気質なのに、上手に生かせない自分がもどかしい。ではこうしよう。イヌの顔をもちながらも、ネコの性格を秘めた自分で人とかかわる――〝和して同ぜず〟、これならできるだろうか。